

新潟市教育相談センター  
新潟市特別支援教育  
サポートセンターだより

# も え ぎ

第 119 号  
令和 6 年 2 月 5 日  
新潟市教育相談センター  
新潟市特別支援教育サポートセンター  
新潟市中央区西大畑町458番地1



## 不登校児童生徒への 支援について

後 藤 孝

令和4年度の小・中学校の不登校児童生徒数は約29万9千人と過去最多となりました。不登校児童生徒への対応は生徒指導上の喫緊の課題となっています。

このような状況を踏まえ、本稿では、不登校児童生徒への支援について、基本的な考え方を確認したいと思います。

平成28年の教育機会確保法の公布を受け、令和元年10月に文部科学省は、「不登校児童生徒への支援の在り方について」を通知して、不登校支援についての基本的な考え方や児童生徒理解・支援シートを活用した組織的・計画的な支援、多様な教育機会の確保等について示しました。その後も、いくつかの通知や緊急対策パッケージを公表し、校内教育支援センター（校内適応指導教室）の設置の促進や、不登校を生まない「学校風土の見える化」等について示してきました。そして、昨年11月には、「不登校の児童生徒等への支援の充実について(通知)」を公表して、不登校児童生徒への支援に対する基本的な考え方を改めて示しました。その中で、「学校関係者には、不登校児童生徒の社会的自立のために当

該児童生徒が学校において適切な指導や支援が受けられるよう尽力いただきたい。」と学校が社会的な自立を促す上で大切な場であることを明示しました。改めて示した理由として、同通知で、「文部科学省がこれまで発出した通知について、「学校に戻ることを前提としない方針を打ち出した」等の指摘があることから、誤解が生じないようにする。」と述べています。

令和元年の通知では、「不登校児童生徒への支援は、「学校に登校する」という結果のみを目標にするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指す必要があること。」としました。このことのみを捉えて、不登校支援が学校に戻ることを前提としないとの誤解が生じたのかもしれませんが。私も、この通知が出た当初、職員会議で通知内容について話題になったことを覚えていています。

学校は、子どもたちが、安心感をもって様々な人と関わりながら学んだり、子どもたちが協力して自ら学校生活をつくったりする場です。学校に行けば楽しいことがあると、子どもたちが思える場所になるように、学校は日々努力をしています。

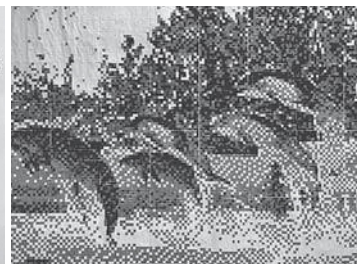
学校は、社会的自立のために大切な場であるということをも前提として、自校の不登校支援をさらに充実させる時期に来ているのだと思います。

## 令和5年度「作品展」の紹介

日 時：令和6年1月26日（金）  
会 場：新潟市教育相談センター

この作品展は、教育相談センターに関わる児童生徒の活動や成長の様子を保護者や学校、外部の方に見ていただき、理解を深めてもらうことを目的に開催しております。音楽発表

では、万代太鼓を披露し、物品販売では、「ぐみの木教室」の通室生が店員として接客しました。各区教育相談室、「絵を描く部屋」や「イラストルーム」に通室している児童生徒が制作した作品も展示しました。多くの方にご覧いただき、子どもたちが達成感や有用感を感じることができた貴重な機会となりました。子どもたちへの心のコもったメッセージもたくさんいただき、ありがとうございました



### 令和5年度 教育相談研究会

## 〈研究主題〉「今、求められている子どもへの支援」

日時 令和5年11月15日（水）14:00～16:30

#### 〈第1分科会・教育相談〉 令和の不登校を防ぐための教育相談の役割～つながる関係づくり～ 分科会指導者 新潟大学大学院 准教授 佐藤 友哉 様

第1分科では「令和の不登校を防ぐための教育相談の役割～つながる関係づくり～」をテーマに、増え続ける不登校の問題に対して、「教育相談」という切り口からどのようなことができるのかを参加者の皆さんと考えました。

教育相談部の発表では、不登校相談の低年齢化が進んでいることや不登校要因として人間関係を起因とするものがかなりの数を占めていることなど、過去3年間に教育相談センターで受けた相談（主訴が不登校）を分析した結果について説明しました。また、相談センターの取組「水曜クラブ・絵を描く部屋・イラストルーム、個別学習室」の効果を紹介し、『安心して子どもと子どもが関われる経験の場』『子どもが好きなことを生かして承認欲求を満たす場』『居場所や学習の場』の支援を意図的に仕組むことが子どもの気持ちや行動に変化を及ぼすことをお伝えしました。

続けて、不登校を防ぐための考え方として、新潟大学の佐藤友哉先生より、認知行動療法の視点からご講演をいただきました。



不登校を「防ぐ」には、「家にとどまる」という行動選択に至る前に「学校内で」解決可能な行動や認知（考え方）のレパートリーを持てるかどうか重要となることを教えていただきました。行動のレパートリーが多いほど予防につながることや、代替行動を考える際には、環境と個人の相互作用を良くする視点で考える、など、令和の

不登校の様相を、モデル図を用いて分かりやすく教えていただきました。

グループワークでは架空事例をもとに、分かっている情報から、本人の心情を推察し、不登校を防ぐための支援方法について、環境への働きかけと個人への働きかけの2つの観点で考えを出し合いました。どのグループも、多岐にわたる支援方法が話し合われ、活発な意見交流が行われました。その後のシェアリングでは、各グループの意見に、佐藤友哉先生より丁寧なご助言、ご指導があり、有意義な時間となりました。



さらに、佐藤友哉先生から課題予防的教育相談として、認知のレパートリーを増やすストレスマネジメントの実践について具体例をもとに説明していただきました。演習を通して、本人の受け止め方や考えを変えることで気持ちにも違いが出てくることを学びました。

最後に、大人が考えた方法を子どもに押し付けるのではなく、できる行動や考え方を子どもと一緒に考えていく、そのことがまさに教育相談の役割であることをご指導いただき、改めて、子どもとつながり、話を聴くことの大切さを強く感じました。

教育相談部では、相談のなかで本人や保護者の思いを受け止め、寄り添うことを大切にしながら相談を進めています。今回の研究会で学んだことを生かし、今後も本人や保護者と繋がりがながら伴走型支援を進めていきます。

#### 〔第1分科会〕参加者の方々の声



- ・グループ活動も全体での共有も、自分では考えが及ばないものを聞くことができ勉強になった。
- ・佐藤先生のご講演はとても実践的で、認知行動療法の視点で児童や保護者と関わる場面を思い浮かべながら拝聴した。さらに関心が高まった。
- ・認知行動療法の目標は環境を整える、個人の行動とレパートリーを増やすことだと思った。
- ・佐藤先生のお話がとても楽しく、学びになった。生徒を指導する際にどうしても問題行動に目が行きがちだが、適応行動に焦点を当てるといった部分が参考になった。

- ・目の前の子どもたちや保護者からの相談に、つい答えを見付けがちだったが、一緒に考えることを大切にしたい。
- ・実践的な学びが得られ、非常に価値ある研修会となった。講義、グループワークは不登校対応における教育相談の重要性を実感する貴重な機会だった。

#### 〈各室・夜間「学習・進路相談室」・訪問教育相談の活動紹介〉

研究全体が始まるまでの時間、それぞれの取組や活動の様子についてプレゼンテーション(ソフト)で紹介しました。

感想を紹介します。

- ・映像から、皆さんの日々の取組が分かった。
- ・様々な体験活動が行われ、各室によって特色があった。
- ・夜間「学習・進路相談室」は歴史のある教室で、一人ひとりに丁寧に支援していると感じた。



#### 〈第2分科会・適応指導〉心の居場所をつくる支援のあり方

分科会指導者 新潟青陵大学大学院 教授 浅田 剛正 様

第2分科会では、「心の居場所をつくる支援のあり方」をテーマに掲げ、新潟市内の小・中学校と「ぐみの木教室」の実践例や事例について、「安心できる」「その子の強みを生かす」「適切なコミュニケーションができる」という三つの柱に焦点づけて発表しました。

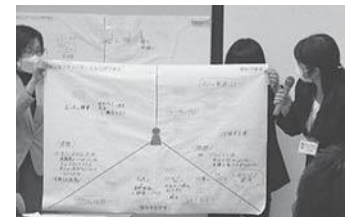
中学校の実践例では、物理的な安心が得られるよう、適応指導教室の運営を工夫することはもちろん、学校全体で寄り添えるような体制づくりがされており、子どもの心理的安心につながっていました。小学校の事例では、子どもの話、保護者の話をじっくり聴いて、心理的安心が得られる方法を一緒に探るところからスタートしました。学校に適応指導教室が無くてでもできる対応が工夫され、その児童には友人ができました。進学先の中学校にも支援方法が適切に引き継がれ、多様性を認める支持的風土の醸成が学年全体で行われました。その結果、友人関係を良好に保ちながら、自分に合った環境で成功体験を積みことができ、不登校状態を脱することができました。どちらの例も、子どもや保護者の話を聴き、安心できる居場所を整えながら、本人の強みを生かし、適切なコミュニケーションの機会をつくるなどの支援が行われていました。



当センターの事例では、物理的、心理的な安心を保ちながら、本人の強みを生かして自信につなげるとともに、小さな失敗を振り返りながら、適切なコミュニケーションができるように支援していることを紹介し、冒頭の三つの柱に焦点づけて支援を工夫していく大切さについて発表しました。

続いて、グループワークを行いました。参加者が日頃行っている支援を付箋に記入した後、グループ

内で発表し、意見交換を行いました。各グループでは、ワークシートを基に、支援策を三つの柱に分類し、支援のポイントなどを考えました。その後、各グループから発表してもらい、全体で共有しました。



新潟青陵大学の浅田剛正先生のご講演・ご指導では、グループワークの様子や各グループの発表に触れながら、日々取り組んでいることの価値に気付かせていただきました。主な指導内容は次の通りです。

「何らかのトラブルを抱えた子どものためには、個別に関わる静かな部屋や机、椅子はもちろんのこと、子どもが興味をもちそうな用具や玩具、本などを準備した物理的な居場所の整備が必要です。さらに、適切に声を掛けてくれる人、話を聴いてくれる人がそこにいて、子どもと関わることで「心の居場所」となり得ます。大人がつくる「居場所」を、子どもが「居場所」と感じられるかどうかは、子どもを取り巻く大人たちの声掛け、まなざしといった心遣いが伝わるのが大切です。また、子どもには、様々な大人や友人との関わりによって自ら育つ機会と時間、発達課題や時代に応じた「居場所」が必要です。今後、コロナ禍で失われたサードプレイス（家庭でも学校でもない第三の居場所）の重要性についても議論を重ねることが必要です。」

「心の居場所」をつくるためには、個からチームへと関わりを拡げること、子どもに声を掛けながら、協働してつくっていくことが不可欠だと強く感じました。今後も、心の居場所をつくる支援のあり方について、学校をはじめとした関係機関と連携を深めてまいります。

#### 〔第2分科会〕参加者の方々の声



- ・浅田先生のご講演をお聞きして、自分の実践に足りないものに気付くことができた。今後、どのように取り組んでいくかの、新たな視点をいただくことができた。
- ・自分が悩みながらやっていることを話し、それが良いことだというご意見をいただき、これからも頑張ろうという気持ちになれた。これでいいのかと思いつつ、日々やっていることの価値を確認できて、前向きになれた。
- ・適応指導教室モデル事業や小学校で開設している事例やその過程についてもっと知りたいと思った。

- ・不登校児童への接し方について、もっと丁寧にすることが大切だということに気付くことができた。まず校内でケース会議を開き、いろいろな立場の方から話を聞き、ひとりで抱え込むことがないようにしていきたい。
- ・適応指導は、授業のテクニックではどうしようもない分野なので、担当教諭は余計悩む。各学校での不安なことや困っていることを拾い上げて、少しでも解決できる内容にしてほしい。

## 適応指導部の活動紹介

### 「体験」と「人との関わり」の大切さ

適応指導部主任 長澤 靖子

センター内にある「ぐみの木教室」では、学習支援や自分で挑戦することを決めて取り組むことを目的とした「チャレンジタイム」や、他者と関わる力を育てる「コミュニケーションタイム」を行っています。通室生は、自分のペースで活動に取り組みながら、成長しています。特に、成長を感じることができるのは、体験活動の場面です。様々な体験活動で人と関わることを通して、子どもたちは多くのことを学びます。下記に紹介するのは、様々な体験活動の後で、自分を振り返った通室生の言葉です。

- ・ぐみの木教室に通い始めてから、通う前よりもいろいろな人と関わるできるようになりました。これからも、これを続けていけたらいいなと思いました。
- ・自分を客観視することが前よりできるようになりました。人と接することで、いろいろな世界を知っていくので、より一層、客観視しやすくなりました。

子どもたちにとって、人との関わりや体験活動がいかに大切なことかを教えてくれる言葉だと思います。「ぐみの木教室」が、子どもたちにとって、学校復帰や社会的自立に向けて、前に踏み出す「心のエネルギー」をためられる「心の居場所」となれるよう、今後も支援に努めてまいります。

### けん玉で能力向上を

ぐみの木教室 昔の遊び講師

結城 彰



ぐみの木教室で、昔の遊びとしてけん玉を教えるようになって15年になりました。近年は、各区の教育相談室からも声をかけていただき、毎年お邪魔している教室もあります。

けん玉は手だけではでなく、全身を使う運動です。また、集中力を高め、脳の活性化に有効です。技を成功させるためには粘り強く練習に取り組む必要があります。けん玉には、様々な能力を高めるよい効果があります。

けん玉の正しいやり方を伝え、練習を始めると、誰でも必ずできるようになります。技ができるようになると、達成感や大きな喜びを感じることができます。そして、次の技に意欲的に挑戦するようになります。汗を流しながら、真剣に取り組む姿が多く見られます。できた技に応じて、日本けん玉協会の正式な級位認定証をあげています。

このような活動を通して、「できる」という喜びと同時に自信をもたせたいと思っています。それが自己肯定感の向上につながることを願っています。そして、けん玉を使ったこの活動が不登校の解消やコミュニケーション力の向上に少しでも寄与できればと思っています。

### 夜間「学習・進路相談室」から

夜間「学習・進路相談室」主任 坂井 毅

夜間「学習・進路相談室」には、様々な悩みを抱えながら、多くの中学生が通室してきます。中には、年度を跨いで、継続して通室する中学生もいます。

昨年度から、継続して通室している中学生は、ほとんど欠席することなく、通室しています。細かい部分に気配りし、称賛に値する言動のできるすばらしい中学生です。具体的には、受付時に大きな声で「こんにちは」とあいさつができます。また、退室する前に、使用した机や椅子を率先して整えることができる人もいます。さらに、玄関先で丁寧に講師に一礼して、お礼を述べて帰る人もいます。

人は、いつからでも変わる可能性を持っています。また、子どもたちが変わる可能性を持っていると信じるのが、大人の使命だと考えています。

昨年度、通室した中学生から「夜間学習室に通室することで、学習に対する考え方が変わり、どんどん自分に自信が持てるようになりました。今では、驚くくらい、将来に対して不安もないし、やりたいことがたくさん見つけれられるくらい変わったと思っています。」という文が記述されていました。

夜間「学習・進路相談室」に通室する一人ひとりの中学生が「心のエネルギー」を充電し、自信を持って、自分の道を歩き出すことができるように「伴走者」となって、最大限支援していきます。

### 一歩でも半歩でも前に向かって

北区教育相談室 長谷川 智

北区の不登校児童生徒数は小学生107人、中学生124人合計231人です。それに対して、来所相談延べ68件、電話相談延べ13件、通室31人、通室体験3人、訪問6人となっています。(11月末現在)

北区教育相談室では、子どもの心に寄り添い、丁寧な支援をしながら、職員と子ども、子どもと子どもの関わりや体験を継続しています。それによって、ここが安心できる居場所となり、心のエネルギーを蓄えて、向上的変容をしている子どもたちがいます。

- ① 家にずっといた子が相談室に来られるようになった。(見学・体験から通室へ)
- ② 通室と放課後登校ができるようになった。
- ③ 来室時刻が早くなり、通室回数が増えた。
- ④ 相談室でのコミュニケーションが増えた。
- ⑤ 相談室への通室が減り、別室登校が増えた。
- ⑥ 別室登校が減り、教室登校が増えた。

相談室を「ここは私の学校だから」と言って通室していたある生徒が、現在は毎日教室に登校しています。一歩でも半歩でも前に向かって進めるよう寄り添う事が大切なのだと、職員一同改めて確認することができました。